

[実践研究]

障害者の文化芸術活動における社会包摂機能の可能性について  
— 先行研究とインタビュー調査の検討を通して —

澤 屋 真 樹<sup>1</sup>

**The Possibility of Social Inclusion Functions in Cultural and  
Artistic Activities of People with Disabilities  
— Through a Review of Previous Studies and Interview Surveys —**

Maki SAWAYA

**Abstract**

The purpose of this paper is to examine the possibility of social inclusion function of cultural and artistic activities of people with disabilities. The results of the study showed that independent expression and self-expression in a free space created with professional artists. We concluded that this enables subjective self-confidence and the experience of being recognized by others, and that the possibility of a social inclusion function is possible. On the other hand, we found that cultural and artistic activities as social welfare support are often conducted as part of leisure time activities, and that it is important to clarify the purpose of the activities.

**Keywords:**

障害者 文化芸術活動 社会包摂 アーティスト, 社会福祉援助

People with disabilities, Cultural and artistic activities, Social inclusion, Artists, social welfare assistance

1. はじめに

2011年に閣議決定された「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第3次基本方針）<sup>1)</sup>」で、文化芸術の振興の意義に社会包摂機能について記された。「文化芸術は、子ども・若者や、高齢者、障害者、失業者、在留外国人にも社会参加の機会をひらく社会的基盤となり得るものであり、昨年そのような社会包摂の機能も注目されつつある。」と記されている。

また、2018年には、文化芸術活動を通じた障害者の個性と能力の発揮及び社会参加の促進を図ることを目的として、「障害者文化芸術活動推進法<sup>2)</sup>」が施行された。

広島でも長年にわたりアーティストが余暇活動や生涯学習などの時間に指導者として様々な分野で文化芸術活動を行っている。

教育分野、芸術分野での先行研究では、文化芸術活動の社会包摂機能が認められているが、社会福祉分野からの考察はほとんどない。

<sup>1</sup> 広島文化学園大学 人間健康学部

(Faculty of Human Health Science, Hiroshima Bunka Gakuen University)

本稿では、教育分野、特に社会教育分野と芸術分野の先行研究を頼りにしながら、障害者の文化芸術活動の社会包摂機能の可能性について考えてみたい。

## 2. 社会包摂活動としての文化芸術活動 ～社会教育学からのアプローチ～

宮崎<sup>3)</sup>は、『社会教育と福祉と地域づくりをつなぐ』の中で、社会包摂活動としてドラマやクリエイティブ・ライティングなどのアート活動が取り入れられていると述べ、社会包摂活動を可能にするアート活動の意義を以下のように示している。

第1に、表現には自己形成を支える機能がある。第2には認識や行為の前提となっていた枠組みについての省察の可能性である。第3には社会的支援の諸制度を機能させる触媒効果である。

第1の表現であるが、表現はそれを受け取る他者が存在して初めて成立するものである。社会的排除を表現を受け取る他者の喪失と理解すれば、表現を取り戻すことが社会包摂の第1歩となりうる。

第2の認識や行為の前提となっていた枠組みについての省察の可能性である。宮崎はアートとは虚構の空間や時間を創り出すが、それが他者と創造されているのならば、アート活動とは新たな意味を社会的協働的に算出することになる。それは、自己形成の前提となっていた概念や視点を相対化すると述べている。

第3については、別の機会に検討する。

以上のように、文化芸術活動とは、自己と他者で創るという行為であり、虚構の空間や時間を作り出すがゆえに自由度が高く、既存の概念や視点を相対化する。よって、社会包摂機能を持つととらえることができる。

これらを踏まえて具体的な文化芸術活動を対象とした先行事例研究を挙げてみる。

## 3. 小学校、及び社会福祉施設での文化芸術活動について

### (1) 先行事例研究1

「障害者の演劇活動がもたらす社会関係性の変容<sup>4)</sup>」

実際の福祉事業所における演劇活動の実践からどのように社会包摂が進んだのかを明らかにすることを目的とした論文である。

方法は地域の市民ホールで上演された演劇への参加者(職員、利用者)への非構造化インタビュー、半構造化インタビュー及び質的研究(修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)である。インタビュー時期は公演の半年前とひと月前。

考察には、「参加者の実感」と「地域社会の社会包摂」について述べられている。

「参加者の実感」では、参加者は活動当初(不安)を感じていたが、次第に演劇を創造することに(面白さ)を見出している様子が示されている。その理由は「出演者の個性を踏まえた配役を行い、即興を交えた自由度の高い演劇を創作したこと」である。このような演劇活動を行った結果、利用者からは「自身のポジティブな変化の実感」、から「自信」につながったという語りが多くみられた。

「地域社会の社会包摂」については、観劇者から感動やそれに伴う彼らへの価値観の変容が見られた。例えば「こんなことができる」と知らなかった」などである。また、利用者は、家族や知人が観に来てくれることを励みにしており、観劇者からの反響は本人たちの達成観や地域との繋がりを実感する契機となった。

### (2) 先行事例研究2

「演劇ワークショップの社会包摂的側面への期待とその実際<sup>5)</sup>」

具体的なワークショップを研究対象とし、自己と他者の具体的な相互行為に社会包摂機能が見られるのかを検証している論文。

先行事例を踏まえながら、小学校の特別支援学級での演劇ワークショップをフィールドワークと

映像による相互行為分析を行っている。また、ワークショップを運営した教員とアーティスト（ファシリテーター）への半構造化インタビューを追加し、分析を補完している。

このワークショップは、外部のアーティストがファシリテーターになって積極的に児童に働きかけている。アーティストがかかわることによって、「教える」のではなく「一緒に楽しむ」という関係性が見られた。子供の働きかけを待ったり、単に「褒める」のではなく、「面白いね!」とか、「そこがいいよ!」という声掛けをしたり、教員とは違う側面が評価されていた。

また、いつもと違う関りが行われたことで、既存の手法では見落とされていた子供たちの価値が発見され、価値の転換が見られた。

コミュニケーションの手法としては、ワークショップの中に非言語コミュニケーションが積極的に取り入れられており、言葉での表現が苦手だった子供が、自分に合った表現方法に出会う経験ができた。

よって、自己表現、自立した表現が子供たちに見られ、安心感や楽しさを児童が感じることができ、自己肯定感や他者との学びが見て取れた。

### (3) インタビュー調査 1

〈演劇活動40年のアーティストによる文化芸術啓発活動について<sup>6)</sup>〉

広島で劇団を主宰しながら、文化芸術の啓発活動をしているAさん（70代男性）にライフヒストリーインタビューを行った。

1990年代。ある障害者施設のコンサートでの舞台（演劇）作りについての語り。車いすを自力で動かすことも手を動かすことも難しい利用者を劇にどのように登場させるのか。Aさんは演劇のシナリオを作る段階で、本人や家族施設のスタッフから聞き取りをした。そしてカープが好きなことが分かったので、カープに囲まれたシーンを作った。

「Sセンター（コンサート会場）のあそこ中でスポット浴びて、音楽が溢れる中で芝居をして、

こうやってもうこうするしかない（手が動かさないジェスチャー）。…カープの帽子かぶってますけど。『カープ、カープ、カープ広島、広島カープ』の歌を入れながら出てきてからさ。引っ込むだけなんだけど、それも一つのストーリーに組み込むよ。』

また、それを見た親がステージに上がった我が子を見て泣いたというエピソードも語ってくれた。

「親が涙を流して喜んだ。みんなが出て、うん。こんなふうだね、出させてもらえるって。」

## 4 考察

### (1) プロのアーティストと創造する自由な空間での自立した表現、自己表現の出現

事例研究1では、配役段階から本人の個性に合わせた演劇創りがされていた。

事例研究2ではアーティストが「一緒に楽しむ」関りをしていた。このことにより、本人たちは安心し、自信をもって自分を表現することができており、他者から認められることで、さらに自らの変化をポジティブにとらえることができています。

インタビュー調査1では、意思表示の困難な利用者の人となりを知るために、家族やスタッフからの聞き取りをし、それをもとに脚本を制作している。好きなもの（カープグッズや歌）とともに登場したその利用者は、いつもよりも明るい表情をしていたとAさんは語った。

### (2) 自己の主観的な自信と他者から認められるということ

事例検討1では、利用者自身のポジティブな変化の実感から本人の自信につながったという結果が出ていた。また、観劇者からは感動と彼らへの価値の変容が見られた。事例検討2では、児童たちが自己肯定感を持つことができ、他者との学びを経験することができたという結果が報告されている。

インタビュー調査1からは、明らかな結果は得

られなかったが、舞台上の利用者の明るい表情や、わが子が舞台上に立ったことに感動する母親について語られており、本人や他者のポジティブな変化が見て取れた。

### (3) 社会包摂機能としての文化芸術活動とは ～社会福祉援助としての考察～

先行事例研究とライフヒストリーインタビューを手掛かりに具体的な社会包摂機能としての文化芸術活動の可能性について検討を行った結果、その可能性はあるとの結論に至った。それでは、次の段階として、社会福祉分野で、主に障害者を対象とした社会福祉援助としてどのように位置づけたらよいか。先行文献を手掛かりに考察をする。

丸山<sup>7)</sup>は、「新・現代障害者福祉論」の中で、社会福祉援助の専門性として余暇活動の保障を位置付けており、その中に文化芸術活動が含まれると記している。

また、障害者の余暇に関わる援助について、「どのように援助するのか」の前に、「どのようなことを目指して援助するのか」が重要であると述べている。

本稿の先行事例研究1の参加者の中には、利用者の変化や成長について、変化した実感がないと回答した者がいた。これについて松本ら<sup>8)</sup>は楽しむことが目的となっており、変化や成長に着目することがなかったのではないかと述べている。

筆者も、外部のアーティストと共に余暇活動を行っている事業所をいくつか訪問し、アーティストや余暇活動の担当職員に目的を聞いたことがあるが、ストレス解消や楽しむことが目的であるとの回答であった。

障害者の社会福祉支援での文化芸術活動は、余暇活動の一環で行われることが通常であり、また、活動目的が重要であることが分かった。社会包摂を具体的な目的にしなければ、文化芸術活動が社会包摂機能を併せ持つことは困難である。

## 5. 結論

2つの先行事例研究と一つのライフヒストリーインタビュー、そして文献を検討することにより、障害者の文化芸術活動には社会包摂機能があると結論付けたが、実際の社会福祉援助の現場では、その活動の目的によっては、必ずしも社会包摂機能を持たないことが分かった。

1990年代以降、社会福祉政策の大きな転換の中で、日々の事業に追われ、余暇活動自体が減少して事業所もある。また、コロナウィルス感染の拡大による活動自粛により、さらに減少しているといった話も聞く。

今後の研究としては、社会福祉援助の現場で、余暇活動や文化芸術活動がどのような位置づけとなっているのかを把握するための調査を考えている。今回インタビュー調査が一つと不十分だったので、さらにインタビューを重ねる。また、障害者と社会包摂機能の関係について理解を深める。社会包摂とは具体的にどのような状態のことを指すのか、先行研究の分析を進める。

## 謝辞

本インタビューにご協力いただいた方に深く感謝申し上げます。

## 引用及び参考文献

- 1) 文化庁 (2011) 文化芸術の振興に関する基本的な方針 (第3次基本方針)
- 2) 文化庁 (2018) 障害者による文化芸術活動の推進に関する法律の施行について
- 3) 宮崎隆志 (2019) 暮らしづくりの支援における価値とその意義松田武雄. “社会教育と福祉と地域づくりをつなぐ：日本・アジア・欧米の社会教育職員と地域リーダー.” 42-56
- 4) 松本奈津実, and 安井友康 (2019) “障害者の演劇活動がもたらす社会関係性の変容：実践参加者へのインタビュー調査から.” 北海道教育大学紀要. 教育科学編 145-153

- 5) 長津結一郎, 中山博晶, and 松井志穂 (2018) “演劇ワークショップの社会包摂的側面への期待と実際：特別支援学級における演劇ワークショップを事例に.” 芸術工学研究 29 : 21-31.
- 6) 2023.10.6のAさんへのインタビュー (広島文化学園大学人間健康学部研究倫理委員会：承認番号：HS-2023001)
- 7) 丸山啓史 (2019) “余暇の権利と社会福祉援助” 鈴木勉, and 田中智子. 新・現代障害者福祉論. Hōritsu Bunkasha, 138-145
- 8) 松本奈津実, and 安井友康 (2019) “障害者の演劇活動がもたらす社会関係性の変容：実践参加者へのインタビュー調査から.” 北海道教育大学紀要. 教育科学編 145-153